

# 宋代就糧禁軍について

——宋代兵制史研究の一環として——

小岩井 弘 光

- 一、はじめに
- 二、宋代禁軍の地方駐在について
- 三、就糧について
- 四、土兵について
- 五、郷兵と就糧禁軍
- 六、西北辺の就糧禁軍
- 七、東南諸路の宣毅軍
- 八、福建・広南路と澄海・宣毅軍
- 九、宣毅軍の衰退
- 一〇、まとめ

## 一 はじめに

唐末五代の混乱を統一した宋は、文治主義を標榜したが故に、反面より軍事面にも配慮を必要とした。その意味で宋代兵制史の考察は、既に幾多の論考がある<sup>①</sup>とはいえ、依然考察の対象となり得よう。そこ

で小稿は筆者なりの宋代兵制史整理の立場から、何らの新知見を加え得ぬことをおそれつつ、宋代就糧禁軍について考察をするものである。なお小稿の対象は主として仁宗朝の宣毅軍に限らざるを得なかった。

## 二 宋代禁軍の地方駐在について

宋代兵制の中核は周知の如く禁軍であり、中央集権体制下の一環として、「太祖監前代之失、萃精銳於京師」（宋史卷一八七、兵志一、禁軍上）とある如く、中央に集中せられ、その額も、太祖開宝年間には、十九万三千人に過ぎなかったという<sup>②</sup>。勿論禁軍は京師の守りに就いたのみでなく、必要に応じ国内外に派出されたのであるが、一般的には更戍制が採られたから<sup>③</sup>（宋史卷一九六、兵志一、屯戍之制參照）、固定永続的に地方に滞在するものではなかった。

この中央より派出せられる禁軍については、

藩鎮須兵屯守者、自京而遣、故有駐泊・屯駐之名、（文獻通考卷一五二、兵四）

とあって、駐泊、屯駐形式の存在が知られるが、より詳しい記述を求めるならば、

宋朝兵制、凡禁兵之親近者、号諸班直、隸於軍頭皇城、内守外備征戍、其出戍或諸州更戍者曰屯駐、非戍諸州而隸惣管者曰駐泊、(山堂群書考索統集卷四、兵制門、宋朝兵、太祖善於制兵)

とある。以て屯駐、駐泊兵の一応の概念が得られたかと思うが、これに関連して繁を厭わずさらに一文を掲げておきたい。

そもそも禁軍は唐府兵制の崩壊の過程で生れ、当然のことながら傭兵制(給与の支給を要する体制としては養兵制)に立脚するものとして宋代に受けつがれたものであるが、南宋の陳傅良、止齋先生文集卷一九、赴桂陽軍擬奏劄子第三に、養兵にふれて、

方今經費、兵居十八、官居十二、官未暇言也、敢言養兵、国初、州郡無禁兵也、著在令甲、自騎射至牢城、凡名額二百二十三、総為本城而已、所謂禁兵者、皆三司之卒、分屯而更戍、今之屯駐、駐泊之名、而鈴轄・都監・監押之官所部領也、

とあって、もともと禁軍は地方に存せず、地方の禁軍の存するは三司(三衙)の兵が分屯更戍したもので、屯駐・駐泊軍であるという。ちなみに本城とは廂軍に含まるべきものである。<sup>①</sup>

以上の事例から、国初二十万前後の禁軍は京師周辺にあるか、屯駐・駐泊兵として地方に派出せられていたことになる。

然して右の禁軍の額であるが、国初二十万弱であったのが、真宗天禧年間に四十三万二千人、仁宗慶暦年間には「西師後増置之数」とあ

るものの、実に八十二万六千人に達しており(宋史卷一八、禁軍一)、宋初に比べ四倍余りに急増したことになる。このことは、先の傭兵(養兵)制の立場からすると、問題を食糧に限っても家族の寄食分も含めれば、国家の負担は莫大なものになったはずで、特に禁軍を本来京師周辺にあるべきものとする立場からすれば、一ヶ処への多額の漕運を必要とし、その面のみからも、国家負担の増大は無視出来ぬ財政上の問題を含むことになる。

そこで当然考えられて然るべきものに、兵士の地方分散がある。京師を本拠とする屯駐・駐泊形式以外に禁軍の地方所在形式を尋ねるならば、右の必要を満たすとみてよい記事が存在する。即ち先の文献通考の一文は続けて、

其京畿諸州便運路者、則有就糧兵焉、許挈家屬以往、

とあって、屯駐・駐泊兵以外に、家族ともども就食に便宜ある地方に駐まった兵士として就糧兵の存在が指摘され、しかも家族同伴なることは、かなり長期に地方滞在するものたるを予想せしめる。同じく山堂群書考索も先の一文につづけて、

非屯駐・駐泊以糴賤而留之者曰就糧、

として、穀物の入手し易い地にある兵を就糧兵と称したことがわかる。さすれば、次にこの就糧兵なるものが、仁宗朝の禁軍急増の事態に、分散の役を果し得るものとして認められるかが問題になる。これについては、仁宗嘉祐七年の宰相韓琦の言(宋史卷一八七、兵志一、禁軍上)の一節が役立つようである。即ち

祖宗時、就糧之兵不甚多、辺陲有事、則以京師兵益之、

とあつて、先ず宋初での就糧兵の存在が確認される。ただその額は多くなく、有事の場合、京師より（屯駐・駐泊）兵が増派されたというわけで、宋初の就糧兵の禁軍全体に占める割合は重視する必要はなかったといえる。ところで「祖宗時、就糧之兵不甚多」なる一句に再度注目したい。これは韓琦の上言当時（仁宗嘉祐七年）にあつて、就糧兵が多数存在したことを前提としてはじめて了解される一句だからである。

つまり、同じ仁宗朝のこととして、八十二万余にも急増された禁軍中には、就食に便宜ある地方に家族ともども長期滞在するものとしての就糧兵が、かなりの額存在したであろうことを推測せしめるからである。

この推測がなりたち、加えて仁宗朝に限らず、爾後就糧軍の増額が進捗すれば、禁軍全体に占める率も増し、国初太祖が企てた禁軍の中央集中はその度合を次第に減ずることになるであろう。然して、陳傅良のいう「国初、州郡無禁兵也、著在令甲」なる状態も変ることが予想される。事実、陳傅良は、先の一文につづけて、

三辺之兵、間因事宜升禁兵者、則所謂四十四処禁軍是已、是為就糧、自（李）元昊叛、而西北有保毅、王倫叛、而東南有宣毅、於是、列郡稍置禁軍、至威果既云多矣、然亦無過大郡要害之處、<sup>③</sup>（中略）元豐兵令、悉以雄節之類、升同禁軍、由是禁軍始遍天下、（中略）自州郡各有禁軍、而三司之卒不出、不出則常坐食於京師、

常坐食於京師則必尽天下之利、（中略）於是、養兵始為大患、

という。先ず三辺の兵で間々禁軍に昇格したものがあつて、これが就糧軍であるといひ、つづいて、李元昊、王倫の事件にふれ、しきりに各地に禁軍が設けられ、威果軍設置のころには地方禁軍は過多の状態になつていた、と記す。李元昊の下西夏侵入、王倫の反乱は後述の如く仁宗朝のことであるから、この陳傅良も又、地方にある禁軍としての就糧軍が、仁宗朝に深く係りあることを指摘しているわけである。

陳傅良はさらに神宗元豐年間には禁軍は天下に遍く存し、三司禁旅の兵の地方転徙はなくなつて、天下の利を尽くし、養兵の費がかさんだという。然も既掲の陳傅良の冒頭の一句には「方今經費、兵居十八」とあり、南宋の養兵費が国家財政の八割にも達したと記されていた。

かくて、仁宗朝前後、禁軍増額と並行して就糧軍と称する地方所在の禁軍の存在が注目され、神宗朝からさらには南宋にかけて、遍く地方州郡に禁軍が存することになり、前述の如く一面では禁軍の中央集中化がくずれ、一面では禁軍増額の事情もあつて、養兵費の増大による国家財政上の問題が生じたことが判明する。

この様にみて来るとき、禁軍中に就糧軍の占める位置を明らかにし、その推移をたどることは、宋代兵制史考察の上で決して無意味な事ではあるまい。小稿が就糧禁軍をとりあげんとし、先ず仁宗朝を中心に考察する所以である。

## 三 就糧について

仁宗朝の就糧禁軍への考察に入る前に、就糧なる用例を二、三とりあげ、その意味を考えておきたい。

前掲文献通考、山堂考索の記述からすれば、就糧軍とは、食糧入手（就食）に容易な地（羅賤の地・漕運便宜な地）にあり、家族を同伴し、長期滞在を推察せしめるものであった。凡そ宋一代を通じて、この解釈のみで就糧軍は理解出来るのであろうか、この点を先ず考えたい。

そもそも就糧軍は五代より存在していた。例えば、後唐末帝清泰二年正月の詔（冊府元龜卷一二四、帝王部二四、修武備）によると牢城防禦の兵の不足を補うものとして就糧禁軍が存在していたことがわかる。宋初の存在は韓琦の言で既にみた。ただその実態は明らかでない。飛んで神宗朝には、統資治通鑑長編（以下長編と略称）に、

権陝西軫運副使趙瞻言、辺事息寧、宜分戍兵為三、常依一分就糧于内地、延州可移于鄜州及康寧軍、（中略）以為定法、詔送樞密院、（卷三十四、熙寧五年六月乙卯条）

とあって、北辺の兵を、安寧がもたらされると共に就食し易い地に移す事を就糧と称しており、張方平、樂全集卷二三、論京師軍儲事には一、京東・淮南土壤寬広、財穀足瞻、可容三五万人駐泊就糧、若遣京師禁軍就糧淮南、河北兵士就糧京東、可以省倉儲留辺穀、因其外屯亦可揀退疲冗、

とあって、京師の兵を地方に就糧せしめんとしていたことがわかる。南宋に至っても、

權札部侍郎馮檉言、和議既成、所當措置以善其後、（中略）四曰、蜀兵可分往諸州就糧、以省漕運、（中略）詔三省樞密院相度行之、（建炎以來繫年要錄卷一二）

とあって、漕運の労を省くため、蜀兵を地方に就糧せしめんとしたことが知られる。

以上、宋一代を通じて国境あるいは京師の兵をもって、平時に地方に就糧せしめんとしたことが知られ、これらは、山堂考索、文献通考などにみられる就糧軍の立場に一致するものか、少くとも否定するものではない。

然しながら疑問は残る。先の樂全集にいう「可容三五万人駐泊就糧」とは「駐泊軍として地方に就糧する」と解する方が妥当とも思えるからである。同様な事例を探すと、

詔、発京師禁軍十指揮、赴京東西路駐泊、以備盜賊、京東西路鈐轄、並兼本路安撫都監、京東安撫使富弼言、本路遽增屯禁軍、慮揺人心、欲量增一兩指揮、詔、兵已就道、俟將來歲豐、令還京師、（長編卷一六六、皇祐元年二月辛未条）

とあって、京師禁軍の一部を京東西路へ分駐（駐泊）させたのは「以備盜賊」ためであったから、当然駐泊とあって異存はない。しかし富弼の反対に対し、詔は、兵は已に途に就いたことであるから、今後の歳豊を俟って京師に還さしめん、ととく。明らかにこれは駐泊の実質

目的が就食にあることを示している。つまり就食を目的として地方にある兵は就糧軍に限らるべきものではないのである。

依って就糧軍を地方所在の兵として、中央より派出の屯駐、駐泊軍と明確に一線を画して区別する理由をさらに求める必要があらう。

加えて就食し易き地にあるを就糧兵と解するにも一考を要する。例えば仁宗朝の陝西について、

(陳)琳又上疏論、兵在精不在衆、河北・陝西軍儲數匱、而招募不已、(中略)陝西歲費千五百萬、其賦入支十之五、自余悉仰給京師、(中略)誠願、罷河北・陝西募住營兵、勿復增置、遇欠即選廂軍精銳者補之、仍漸徙營內郡、以便糧餉、(中略)上嘉納焉、

(長編卷一一四、皇祐元年五月丙寅奏)

とあって、この状態は早急に改善されることはあるまいのに、二十余年後の神宗熙寧三年には、

是歲、詔、陝西就糧禁軍額十萬人、方用兵之初、其令陝西・河東函募士補其闕、(宋史卷一九四、兵志八、揀選之制)

とあって、陝西には就糧兵が十万もいたという。さらに陝西のみでなく、河東、河北でも、

〔仁宗至和元年〕河北・河東・陝西募就糧兵、騎以四百人、兵以五百人為一營、(宋史卷一四六、兵志七、召募之制)

とあって、以上西北辺一帶の決して食糧豊かといえぬ地に就糧兵の存在が知られるのであって、就食し易き地にあるを就糧兵とする立場とは合致しないのである。

ここに於て、我々は、陳傅良のいう「三辺之兵、間因事宜升禁兵者……是為就糧」をも参照して、就糧軍とは、西北辺の場合、遼・西夏という外敵に対峙する必要があつて、現地で募られ、現地に就食する禁軍と解してこそ妥当というべきものと思われる。勿論、可能な限り就食し易き地が求められたことはいうまでもあるまい。

#### 四 土兵について

前章に於て就糧禁軍の特色の一として現地兵なることを指摘したが、周知の如く、宋代四兵種としての禁軍・廂兵・蕃兵・郷兵の中の郷兵こそ現地兵の代表ともいふべきものである。然して、ここに就糧禁軍・郷兵といった称呼と別に、はなはだ不明確な用法を含むものであるが、現地兵として土兵(土軍)なるものがあつた。<sup>①</sup>「就其郷井募以禦盜為土軍」(宋史卷一六三、職官志三兵部条)とあるのが、土軍の要を得た説明といえようが、いましばらく、就糧禁軍・郷兵の存在を念頭におきつつ、現地兵としての土軍について考えてみたい。

先ず、土兵を用いて国を護らんとする考えが、就糧禁軍の増加と同時に期の仁宗朝に至つて高まつた様である。長編卷一二五、宝元二年是歲条に、鄭延環慶副都部署劉平が攻守の策を上り(原注・此疏必是年冬末所奏也トアル)「召夏竦・范雍与兩府大臣議攻守之策」<sup>②</sup>と請うたのに続けて、

初夏竦請、增置土兵易戍(兵)東歸、云々

とあり、さらに楊偕の反対に対し夏竦が再奏して、

陝西防秋之弊、無甚東兵、(中略)今募土兵、一則勁悍便習、各

護郷土人自為戰、二則識山川道路、堪耐飢寒、三則代東兵備衛京師、四則歲省芻糧鉅萬、五則今歲霜旱、收聚小民、免至春飢起而為盜、六則增數十指揮精兵、讐伏賊氣、乃國家万世之利、

と反論している。結局この夏竦の奏は採るところとならなかったが、當時土兵をもって關東の兵に代えんとする考があったことが知られ、又土兵の利点も明らかとなったと思う。ために、翌康定元年に至っても土軍利用の考えは消えず、陝西経略安撫副使の韓琦によれば陝西の土兵をもって屯駐、駐泊禁軍と同一任務にあて、しかもその土兵を就糧指揮より選出せんとしている（長編卷二二八、康定元年八月癸巳奏）。土兵と就糧兵の密接不可分なる關係も察知出来よう。

次に康定元年八月乙未に契丹主正旦使となった富弼の言によれば、長編卷一二八、同年月日条に

入辭便殿建言、朝廷悉發京東西・淮南・江南・荆南・湖北・兩浙・福建・広南東西凡十一道兵、以屯關中、十一道兵素寡弱、又遭此調發、故關中得之、未足以充、而十一道之兵尽、朝廷独念京東鄰河朔、京西接關陝、此二道不可以無備、遂遣使閩郷民俾習武、以代官兵、東南九道則不之省、

と先ず記す。従来西夏に近い關中に京西路以下十一路の兵が派せられていたが、その力の弱かったこと、派兵したために十一路も治安維持力を失い、京東、西路は特に重要であるとして、郷民を官兵の代りに充てたことがわかる。十一路からの派兵の兵種は今とはわぬとして、その兵が關中で役立たぬことからすれば、将来該地方の守りには、新

たな兵種が求められることになる。或は既にそうであったからこそ、数日前の韓琦の上言も土兵を用いんことを願ったものである。富弼は続けて「伏思」として、東南九道は宋朝の財政基盤として重要なるを説き、

此九道者、朝廷所仰給也、固宜保守之、今尽取其兵、且不可保守、一日乘虚盜起、梗其津要、則京師無故而坐困矣、今九道大小一百三十余郡、若每郡皆宿兵、固不可得也、臣欲乞、於九道中挾要害約十余郡、如泗揚昇洪吉潭荆桂広福杭越之類、按地理相去均者、于本処募兵、大郡五千、小郡三千、以多補少、不過四五万人、以東南百五十郡之富、豈不能贍養哉、訓為精兵、勿復他役、（中略）如此則欲為寇者知朝廷有備、豈不憚耶、設有盜起、則發兵有所、濟師有地、乘其未甚熾而撲滅之、不為難矣、

とのべる。東南九路維持のため要地に募兵し、専心訓練して精兵たらしむれば盜賊の興起を防げるとするもので、西北辺のみならず、東南地方でも土兵による治安維持を目指したものと見える。又これに続けて、

又言、京東西郷兵、要未足恃、亦請挾要害數郡、別募兵立師、如東南之制、云々

とあり、先にふれた京東、西路の郷兵恃むに足らざる場合、東南の例の如く募兵せんと述べる処から、同じく現地兵とはいふものの、この場合の土兵には通常の郷兵以上の期待があったといえよう。

以上韓琦、富弼兩人の言から、康定元年ころ、西北辺は勿論、東南

地方にいたる全国にわたり、士兵をもって中央より派出の禁軍に代えしめんとする動きのあったことが知れる。

士兵利用の考はその後も強く、慶暦二年春正月壬辰には、知慶州范仲淹が攻守二議を奏した（長編卷一三五、同年月日条）後のこととして、「守以士兵則安、守以東兵則危」とし、士兵の利をといっている。この場合は詔をもつて参議せしめたに過ぎぬが、一方では既にこれより以前、士兵が戦力の中心をなしていたことを示すものもある。長編卷一三二、慶暦元年五月甲戌条に、陝西経略安撫制置判官田況が兵策十四事を上った中に、

七曰、藩落・広鋭・振武・保捷皆是士兵、材力伉健、武芸精強、戦闘常為士卒先、

とあるのがそれである。

以上仁宗朝を中心に、中央からの禁軍に代る土軍の果す役割と、これが西北辺のみならず、全国的に設置が期待されていた事を指摘した。

既に土軍と就糧禁軍との密接な関連のあることは一言した。現地兵という性格からいえば、郷兵も又就糧禁軍と共に、土軍に期待された一端を分ち持つべきものと思われる。次に我々は、郷兵と就糧禁軍の称呼の中に、中央からの禁軍に代るべき役割を尋ねたい。

## 五 郷兵と就糧禁軍

宋代の現地兵には前章にふれた如き土軍という包括的な称呼とは別に郷兵なるものがあり、特に西北辺国境地帯の郷土防衛軍として活躍

した。中でも保毅軍①は、後周の流れをくみ、陝西にあっては真宗咸平四年に保稅戸をもってこれに充て、翌五年にはその数六万八千七百九十五人に達したという（宋史卷一九〇、兵志四郷兵一）。この保毅軍の説明は長編にもあり（卷四九、咸平四、年九月庚寅条）、陝西で禁軍と守備を分担しており、保毅軍に禁軍同様の働きが期待されていたことがわかる。ために右の長編には、

其沿辺軍士、先選中者、並升為禁軍、号保捷、  
という。郷兵たる保毅軍から禁軍たる保捷軍が創られたとみてよからう。同じく長編には、

遣使往邠寧環慶涇原儀渭隴鄜延等州保安軍、選保毅軍取二万人、各置營本州、号振武、升為禁軍、（卷五一、咸平五年五月丙辰条）

とあって、陝西では、保捷軍のみならず、振武軍なる禁軍も保毅軍より昇格している。

以上の経過と先の田況の「藩落・広鋭・振武・保捷皆是士兵」なる一節と併せ考えれば、この郷兵たる保毅軍から昇格した保捷、振武両禁軍は引き続き現地兵たる土軍と称せられており、これを就糧禁軍と考えてよからう。もって郷兵、就糧禁軍、土軍三者の密接な関連を察し得よう。

ともかく就糧禁軍は五代より存在し、宋初はその額は多くはなかったが、真宗朝に至り、右の如き郷兵からの昇格などがあって、次第に増額の傾向にあったといえる。

次いで仁宗朝に入るや、康定元年西夏との対立が生じ、禁軍の増額があった（最終的には八十有余万人）。この事情を宋史卷一八七、兵

志一禁軍上、の記述に求めると、詔をもって募兵がなされ、その折、士兵と京師派遣の兵士の比較を記したあと、

故議者、欲益募士兵為就糧、於是、增置陝西藩落・保捷・定功：

…陝西河北振武・河北京東武衛、……

とあり、保捷軍等の就糧軍が募れたことが判る。右の宋史の一文は、さらに西北辺のみならず京師辺での増募にもふれ、結局禁軍は「増内外馬歩凡數百營」なる状態に至ったという。かくて仁宗朝に就糧禁軍の増額があったことが追認されるが、右の宋史（禁軍上）に幾多記された軍名の成立年代、事由、指揮数等は、同書同卷、建隆以来之制に記載されている。それによると、右の軍名中で最多指揮数のものは保捷軍である。そこで以下に仁宗朝における就糧禁軍設置の過程について保捷軍に係る記述を中心に考えたい。先ず西北辺の郷兵（強壯・弓手）に言及しよう。

西夏が康定元年春正月侵入するや、宋史は「詔陝西運使明鎬、募強壯備辺」（卷一〇二）とあって、陝西では強壯が募られた。後長編ではさらに強壯増募を計つたのに対し、韓琦の言により、既に弓手の添差があるので、これを止めたという（卷一二六、康定元年二月丁未条）。康定元年春に於ける陝西の強壯、弓手の存在を知り得るが、この強壯、弓手はその後地域を拡大して募集された。即ち長編卷一二七、康定元年六月甲辰条に、

詔、陝西・河北・河東・京東西等路、量州界戸口、籍民為郷弓手・強壯、以備盜賊、

とあって、京東西路も含むためか、目的も「以備盜賊」とある。弓手

を例にその募集方法を尋ねると、長編卷一二八、康定元年九月乙丑条に記載があるが、袁甫、蒙齋集卷七、奏乞團結民兵劄子にもほぼ同様な内容を記し、さらにその額を

河北在籍者二十九万三千、河東十四万四千、陝西亦十五万、而卒以此制西北兩敵、

と記すから、康定元年当時西北辺の弓手（及び強壯）の額が如何ほどに達していたかが判明しよう。

然し強壯・弓手は郷兵として強く郷里に結びつけられており、ために

康定元年三月詔、陝西所募強壯、止留捍守城池、毋得遣戍辺、  
（宋金要稿、兵一、郷兵）

とあって、折角、多数増募されても、臨機応変の迎撃追撃は不可能ということになる。

とすれば無為に多数の強壯、弓手を待機させるより、これを禁軍に昇格改編して利用することも考えられる。既に真宗朝に保毅軍を就糧禁軍の保捷、振武軍に昇格せしめており、仁宗朝でも同様な策がなされてしかるべきである。禁軍とは明示されぬものの、張方平は河北強壯の三分の二を点選し、辺に備えんとした朝議にふれているし（案全集卷二二、論強壯事）、長編卷一三二、慶曆元年七月己巳条の河東強壯の代人についての詔の原註に、「朔麻云、仍以所招到勇闘兵士、改作禁軍、隸宣毅指揮、今附」とあり、強壯から禁軍たる宣毅軍への昇格が行われたことは明らかで、依って、仁宗朝でも郷兵から（就糧）禁軍への昇格が



行われたと認められよう。勿論全てが郷兵からの昇格でないにしても、その結果、案全集には、

向因夏戎阻命、(中略)至于陝西・河北・京東・京西、增置保捷一百八十五指揮、武衛七十四指揮、宣毅一百六十四指揮、(卷一八、對手詔二道、)

とあって、就糧禁軍たる保捷軍が宣毅軍と共に、仁宗朝の西夏侵入に対処してかなりの額に達していたことが確認出来る。

では以上の保捷軍の事例で明らかにされた如く、真宗、仁宗兩朝を通じて、郷兵からの昇格を多く含み増置せられた就糧禁軍は、その後、如何なる展開をしたのであろうか。次には就糧禁軍中指揮数の多い保捷軍と、それと関連の深い宣毅軍を中心に言及したい。

## 六 西北辺の就糧禁軍

陳傅良が「王倫叛、而東南有宣毅、於是、列郡稍置禁軍」とした宣毅軍の初置は、長編卷一三一、慶曆元年二月辛丑条に、

詔、京東西・淮南・兩浙・江南東西・荆湖南北路招軍、宣毅軍大州兩指揮、小州一指揮、為就糧禁軍、先是、河東北、陝西与京東西皆增募郷兵、其後遍令天下、各增募額外弓手、於是始立宣毅軍額、以統之、

とあって、西北辺郷兵増募をもとに額外弓手を全国で募ることから宣毅軍が設置され、慶曆元年に東南諸州に及んだという。ただ既に陝西に保捷軍、河東北に強壯があったから、

惟陝西仍故号為保捷、兩河強壯、雖別名義勇、亦有隸宣毅者、と続け、陝西路だけは故号の保捷軍と称したという。ここに宣毅、保捷兩軍は異名同質のものたるが判り、以下兩軍を同一に扱いたい。

ではこうして成立した就糧禁軍はどれ程の額に到ったかというと、陝西保捷軍を例にとれば一八五指揮(案全)で、一指揮五百人とすれば、九万二千五百人となる。陝西の弓手は十五万(案考)だったというから、河東強壯の点選と同じく、約三分の二の郷兵が就糧禁軍となったことになり、兵額からいって、西北辺の主役は郷兵から就糧禁軍に移ったともいえる。

ではこうして一応の額に達した就糧禁軍は、前掲の土兵の利点を生かして、期待通りの働きをしたかというに、再び保捷軍に依ってみるに、長編卷一六七、皇祐元年十二月壬戌条の詔によれば、李元昊の死去した翌年の皇祐元年に陝西九万の保捷軍のうち、役立たざる三万五千を帰農せしめたが、これに對し残された者は不運をなげいたとあり、しかも一卒一年七十緡を要したとある。保捷軍の戦意喪失の状態が察せられ、かつ財政支出の面でも負担大であったことが知られる。旧来のままの保捷軍については再考の要ありというべきで、事実長編は続けて、宰相文彦博が省兵を建議したことを記したあと、「上意乃決」として、省兵の実施を記すが、なかでも、陝西保捷軍の省兵の対象となる者特に多く、官を欺いてまで帰農を望んだと記すから、ますます保捷軍の質の低下は明らかで、その対策が必要とされよう。

以上の推移に関連して、蘇軾、蘇東坡後集卷一七 張文定公(方平)

墓誌銘には、

方（李）元昊之叛也、禁兵皆西、而諸路守兵、多揀赴闕、郡縣無備、命調額外弓手、公在睦州条上利害八事、及是有旨、遣使於陝西・河東・京東西四路、刺弓手為宣毅、保捷指揮、公連上疏、爭之甚力、不從、宣毅十四万、保捷九万人、皆市人不可用、而宣毅驕甚、所在為寇、自是民力大困、国用一空、識者以不從公言為恨、とあって、張方平が反対したにもかかわらず保捷、宣毅兩軍が額外弓手より刺点せられていたが、結局兩軍とも欠陥を露呈し、公も民も苦しんだという。ここにも就糧禁軍の低下が認められる。然しだからといって就糧軍が廢止の途を辿ったかという点、そうではなく、熙寧三年の詔では、陝西に十万の就糧軍があり（宋史卷九十四、兵、哲宗、徽宗朝志八、保捷之制、兵志一禁軍上）。たとえ名額のみになっても各地に保捷軍が残っていた。その消滅については後文で宣毅軍を例にふれることにしたい。

以上仁宗朝の西北辺多事の際、増置、新設されて、西北辺の守りの中心となった保捷軍や宣毅軍などの就糧禁軍は、その後次第にその質を低下していったが、ともかくも保捷軍を例にとれば北宋末まで存続した事を明らかにした。なんらかの存在意義がまだ認められていたものであろう。

ただ西北辺の就糧禁軍は右の如く実質を喪つていったと思われるが、就糧禁軍は東南地方にも存置されていた。京東西路等の直接外敵と干戈を交えぬ該地方での就糧禁軍は如何なる推移をもったのである

うか、次に宣毅軍を中心に辿ってみたい。

## 七 東南諸路の宣毅軍

西夏侵入に對し、中央乃至後方地域からの派兵もあった、前掲富弼の言（長編卷二八、康定元年八月乙未条）では、先ず東南十一道の兵が調されている。ただこの結果、東南地方は軍事上空白状態となり、前掲張方平墓誌銘では、禁兵が全て西征したので「郡縣無備、命調額外弓手」と記す。この額外弓手にこそ注目すべきであるが、これについての張方平の言及は、樂全集ならびに長編にあるので、以下適宜引用言及したい。

康定元年末に係るものと解される「論天下州縣新添置弓手事宜」（樂全集卷二）は、先の墓誌銘にもふれてあった如く、睦州通判として天下州縣の（額外）弓手について八ヶ条に分けて論じたものであるが、その形式は「一、勅文云云」として先ず既発の弓手に係る勅文を記し、以下に彼の意見を記したもので、勅文の内容を整理すれば、康定元年末ころまでの弓手の状態を示すものといえる。今原文を引用する余裕をもたないが、勅文によって弓手の一、二の特色を記せば、弓手の差点は四、五等戸に配慮は施されるものの、見管帳籍主戸内よりなされ、県ごとに禁軍一指揮と同じ五百人を単位としていた。無防備となった東南諸路を守る当然の策ともいえる内容で、組織単位からみれば弓手から禁軍への変更も可能であったといえよう。叙上の如き勅文には、張方平が意見を述べているが、その指摘によれば、台帳となる見管帳籍は地方によって内容の差異があり混乱が生ずるし、小県の場合、弓手

の対象たるべき主戸が少く組織維持力があるか等々の問題があった様で、このことが事実ならば、右の額外弓手による治安維持の効力にも限界を認めざるを得まい。このためか、一方では既に富弼は康定元年八月乙未に淮南等東南九路の要地十余を選び募兵し、州の大小に応じ駐兵せしむれば総計四、五万に過ぎず、財政面でも問題はないと提言していた<sup>(長編卷二二八)</sup>のであった。

かかる事情を考慮すれば、額外弓手を廃止あるいは昇格改編するなどの対策が東南諸路に生じてよろしかろう。長編卷一三一、慶暦元年二月戊戌の詔で、京東路以下東南諸路に就糧禁軍たる宣毅軍を大州二、小州一指揮設置せんとした事情もかくて了解されるはずである。特に右の一文の原註に、「蓋所招宣毅軍、其軍士即去年增募額外弓手也」とあるのは、右の推察の誤りなきを証するものであろう。次にかかる事由をもって布置された東南諸路の宣毅軍の推移を考えたい。陳傅良は「自元昊叛而西北有保毅、王倫叛而東南有宣毅」とのべた。しかるに李元昊の西夏侵入に対処したのは従来からの保毅軍もさることながら、新募の就糧禁軍たる保捷軍であった。その意味で先ず陳傅良の王倫の乱を宣毅軍設置に懸ける見解が妥当か否から考えるのも一法であらう。

王倫の乱とは慶暦三年五月京東路沂州の虎翼軍兵卒王倫が、巡検を殺し淮南東路揚州に至り、その間「所過巡檢尉尉皆畏避、不敢出」という状態であったが、七月淮南西路和州で敗れたという事件で<sup>(宋会要稿兵一〇、討叛王)</sup>あるが、この乱については欧陽脩の論及が参照さるべきである。欧

陽文忠公集<sup>(国学基本叢書本)</sup>の奏議集卷二、論沂州軍賊王倫事宜劄子によると、王倫の南下途次の淮南東路高郵軍において「比至高郵軍、已及二三百人」とあるに過ぎざるに、郡守晁仲約は開門し、賊を犒ったという。如何に当時の州郡警察力が弱体化していたかがわかる。さらに「再論王倫事宜劄子」<sup>(卷同)</sup>には五条にわたって欧陽脩の所見をのべ、知州らの無力を示すが、その第五条には

一、臣竊見、自来所差巡檢兵士、多不能捕賊、反与州県為患、臣今欲乞、自朝廷選舉使臣、令使臣自選舉兵卒、不拘廂禁軍、令所在州軍、指名抽射、仍重立賞罰之法、

とし、巡檢と指揮下の兵士の役立たざるをのべ、新に使臣を任じ募兵し、廂、禁軍にかかわらず用いんことを建言する。ここにも旧制に代る新治安維持策の期待が知られる。

しかるに「論禦賊四事劄子」<sup>(五卷)</sup>によれば、欧陽脩が王倫の乱後、盜賊多からんとして、備えをすみやかにせんことを乞うたにもかかわらず、対策なく、王倫の乱後に京西の張海の乱をはじめ、桂陽・夔・峽・荆湖・解・滑・許等の諸地方に蠻賊・盜賊が存したとして、彼は次の如く対策を論じている。

臣計方今禦盜者、不過四事、一曰州郡置兵為備、(中略)臣竊聞、州郡置兵、富弼已有条奏、(下略)

この一文は長編卷一四二、慶暦三年九月癸巳条にもあるから、王倫の乱鎮定を三年七月とすれば、約二ヶ月ほどの間の各地の反乱統発の事態に対するものとみられ、対策四事のうち、第一が「州郡置兵」た

るに注目すべきである。王倫の乱に巡檢、県尉が役立たず、以後も反乱続発なることは明らかであるから、ここにいふ「州郡置兵」は、これとは別形態であらねばなるまい。又「富弼已有条奏」と竊聞したという富弼の内容は直接には如何なるものか判明せぬが、既掲の康定元年八月乙未の建言（長編卷二二八）が、同一人の主張なるをもって、ほぼその要旨に変わりなきものとすれば、東南諸路に募兵をもつて要地を抑えんとした考えといえよう。然して、この「州郡置兵」の主張は、「再論置兵禦賊劄子（慶曆三年）」（四）によると、

臣近為張海等賊勢猖狂、曾上言禦賊四事、内一件州郡置兵為備、風聞、朝議已依富弼起請施行、（下略）

とあつて実行の段階に入つたかに察せられるが、さらに右の前段階にあたる内容として、前文に引き続き、次の如く記す。

臣伏見、去年朝廷於諸道州府招宣毅兵士、及添置郷兵弓手、當時擾攘次第不小、本要為州県禦賊之備、及一旦王倫・張海等相繼而起、京東・淮南・江南・陝西・京西五六路二十州軍、数千里内、殺人放火、肆意横行、入州入県、如入無人之境、則去年所置宣毅兵・郷兵・弓手等、尽皆何在、無一処州県得力者、蓋由官吏不得其人、賞罰無法、而所置宣毅・郷兵・弓手、皆不堪使用、所以張皇擾攘、空有為備之名、而無為備之用、（下略）

とあり、王倫・張海らの乱にあたり、前年（慶曆三年）設けられた宣毅軍、郷兵、弓手が役立たなかつたとする。これに先立つ慶曆元年に額外弓手による宣毅軍が東南諸路に設けられた事情は再三ふれたところであ

るが、引き続き同二年にも継続設置されたものの、その無効が三年に明らかにされたのであるから、歐陽脩や富弼が期待した「州郡置兵」とは、これより有効なものであつたろう。しかし結局は宣毅軍の再募という形しか見出せなかつたようである。

慶曆三年、因王倫・張海等狂賊數十人、更於江・湖・淮・浙・福建諸路、又添宣毅一百二十四指揮、（集全集卷一八、對）とあるのがそれで、宣毅軍に東南諸路は相変らず依存していたことが知られる。この点で陳傅良の宣毅軍設置の記述は首肯せられよう。

では慶曆元年初置せられ、その効果の程に疑念をもたれつつも増置されていた東南諸路の宣毅軍は、結局どれ程の額に達したのであろうか。慶曆元年には大州二指揮、小州一指揮と詔にあつたものの、その具體額は不明であつた。慶曆三年に至つて、江・湖・淮・浙・福建諸路で一百二十四指揮だつたという（集全集）。張方平による宣毅軍指揮数の指摘は集全集卷二三、再上国計事にもあり、陝西等の保捷軍設置を記した後「既而又置宣毅於江淮・荆湖・福建等路」とし、その註に淮南三十二、兩浙二十二、江東十三、江西十七、湖北十九、湖南十一、福建十二指揮と記す。これは総計百二十六指揮となる。長編の慶曆元年宣毅軍設置の折には福建は含まれず、集全集の慶曆三年宣毅軍添置の折は福建を含み、かつ総計百二十四指揮とあつた。百二十六指揮とその差わずかに二指揮に過ぎない。よつて、先の各路宣毅軍指揮数は、慶曆三年前後の状態を示すものとみなせよう。

かくて今仮りに一指揮五百人とすれば、東南諸路に六万余の宣毅軍

がいたことになり、欧陽脩の指摘の如き弱卒であっても、かかる額の就糧禁軍を要地に布置すれば、一応の治安維持に役立つことが期待出来たのであろう。

以上宣毅軍設置の推移をまとめると、先ず康定元年北辺に初置せられ、翌慶暦元年二月に既設の京東西路及び富弼のいう福建と広南路を除いた東南七路に額外弓手より招置せられ、慶暦三年前後には、福建も対象とされて、江南等の東南諸路に百二十余指揮あったという。右の推移から自ずから就糧禁軍設置の目的も察知せられるかと思うが、では何故に東南諸路のうち福建路は慶暦三年に到ってはじめて設置され、広南路はそれ以後も設置されなかったのであろうか、次にこの点を考えたい。

#### 八 福建・広南路と澄海・宣毅軍

先ず福建路の宣毅軍については、福州の地志、淳熙三山志卷一八、兵防類一、威果指揮に、仁宗嘉祐四年就糧禁軍たる威果軍二指揮を設けたことを記したあと、

先是、慶暦二年詔、諸州置澄海兵士、大郡兩指揮各五百人、四年又詔、上州添置土軍二千人為宣毅指揮、時知諫院蔡襄建言、福建諸郡近依広南、置澄海兵士(原文)、尋又置宣毅、各係禁軍、昨因創選宣毅之時、多于澄海揀撥、今所余人無幾、並存則兵冗、徒費廩食、乃廢澄海、併歸宣毅、

とあり、福建路は広南路に近依したがために澄海軍が慶暦二年より存

し、慶暦三年王倫らの乱に際し東南諸路で宣毅軍が招募された折に宣毅軍を澄海軍より揀選して設置し、翌四年に又土軍をもって添置し、残額少き澄海軍は宣毅軍と并置は利あらずとして、宣毅軍に併歸され、ここに就糧禁軍として宣毅軍による一本化がなされたと解せられる。<sup>①</sup>

右の如き宣毅軍に先行して澄海軍が存した事例は兩浙路明州にも認められる。宝慶四明志(卷七、郡志卷七、叙兵、統軍周軍、威果三十指揮)によればほとんど福州と同じ推移で澄海軍・宣毅軍が設けられている。これは明州が海路福州さらには広南路と近接していたためと思われ、広南路を除く東南諸路全体の立場から、福建路と共に澄海軍が廢され、宣毅軍に統一されたものであろう。

かくて福建宣毅軍設置の事情は判明したとして、広南路は如何かというに、福建で広南路に近依せしがため設けられたという澄海軍にこそ、広南路宣毅軍不置の事由が求めらるべきであろう。

澄海軍の初置は今つまびらかにし得ぬが、長編卷六六、景德四年秋七月壬申条に、広南路知宜州の劉永規が澄海卒を家族ともども「伐木茸州廨」の勞に服せしめ、ために軍校陳進が劉永規を殺し叛したとあり、同じく長編卷七八、大中祥符五年九月癸酉条には、

広州駐泊鈐轄秦義言、州有澄海三指揮、前準詔、止令訓練無得差役、慮浸久驕惰、望徙屯嶺北、從之、<sup>②</sup>(中略)先是、広州言、澄海卒、討宜賊有功、頗希恩榮、軍中不能制、乞部送闕下、(下略)とあり、「討宜賊有功」とは陳進の乱に係るものであるから広南東路

広州にも景德四年宜州ともども澄海軍が存したこと明らかで、しかも広州には大中祥符五年には三指揮があつて、これを嶺北に徙したというのであるから、真宗朝の広南路には各処に澄海軍が存在したと考えられる。

然して宜州陳進の乱は、妻子を含めた兵士への苛酷な差役賦加にあり、これを討ったのが広州澄海軍であるが、宋史卷二九八、馬亮伝によると、知広州馬亮が陳進を平げた折、その澄海軍士の家族に対し「悉置不問」と宥和策をとったのも、同様に日常苛酷な差役に服していた広州澄海軍を意識していたためと思われ、先の秦毅の言は、その轍をふまぬために「止令訓練無得差役」としたのに、かえって兵士は「慮浸久驕惰」なる状態をもたらし、結局広州の兵を嶺北に分散せしめる事態を招いた事を示すものといえよう。

この様に広南路澄海軍には問題が存したがその後もこれが代策は見出せぬばかりか、かえって拡大せんとした。即ち、東南諸路に額外弓手をもって宣毅軍を設置した慶暦二年に、「置福建・広南東西路諸州教閱澄海各兩指揮」、(長編卷一三七、慶暦二年九月壬子条)とあり、あたかも宣毅軍の役立たざるを知りながら増置したのと同様であった。

かくて、広南路では慶暦以後も澄海軍は存続した。仁宗皇祐五年、儂智高の侵入に際し土軍として弱卒の澄海軍があり(長編卷一七四、皇祐五年春正月丁巳条)、英宗治平四年六月、広南東路澄海軍揀刺の事があり(宋史要編兵、五、屯戌)、神宗朝でも広南西路に雄略軍と共に土兵としての澄海軍が就糧見闕諸軍として記される(長編卷二九八、元豐二年六月乙巳条)。この体制は南宋にも及び建武志(永樂大典卷八五〇七)。

(寧、南寧府、戸口所引)の軍額には澄海軍が三十一指揮から六指揮掲示せられている。これは広南西路南寧府のことであるが、その指揮番号からみて、多くの澄海軍が南宋の広南路にあったものとみてよく、宋一代を通じ土軍たる就糧禁軍として広南路の治安維持の務めを果たしたといえよう。

以上要するに、広南路では他の東南諸路に設置せられた宣毅軍と同様の働きをなす澄海軍が永く存続した故に、福州や明州の如き宣毅軍への併帰もなく、逆にいえば、他の東南諸路の如き宣毅軍の設置を必要としなかったといえよう。では東南諸路の宣毅軍は澄海軍の如く永続したかを次に尋ねたい。

## 九 宣毅軍の衰退

長編卷一五四、慶暦五年春正月丙子条に、

樞密副使韓琦言、(中略)復見諸路、昨招置宣毅兵僅十一万、然朝廷物力未充、何以贍給、況閭里竊発、自有巡檢畧尉可捕擊、若防羣盜、只当益屯一路都会之地、不必每州尽要防守、其宣毅兵、欲乞、除河北・河東外、其京東・京西・淮南・兩浙・江南・荆湖・福建等路每指揮、可減以三百人為額、後有闕即招填之、(中略)上悉施用其言、

とあり、慶暦五年西北辺ならびに東南諸路の宣毅軍が十一万であったが、韓琦は群盜を禦ぐためなら宣毅軍は要郡にのみ設ければよいとし、かつ一指揮の兵額も東南諸路では三百人に減ぜんとして実施されている(長編卷一五四、慶暦五年二月戊子朔条参照)。

では何故に折角弘置した宣毅軍を減ぜねばならなかったのであろうか。韓琦の記す財政上の問題もあろうが、より大きな理由は宣毅兵の役立たざること、ひいてはその質的低下と、当局の無策といえよう。

この点を時代を追って尋ねてみると、既に慶暦三年王倫の乱当時については歐陽脩の言及があったが、相前後して起った張海の乱をめぐっていえば、当時樞密副使富弼の言（長編卷一四二、慶暦三年九月丁丑条）によれば、盜賊は白昼公然と横行する状態で、張海の乱も巡檢や県尉では抑えきれなくなっていたという。さすれば、地方にある就糧禁軍つまりは宣毅軍に期待する処大なるはずであるが、張海一味が京西南路光化軍に近づいた時知州韓綱と指揮下の宣毅軍士三百人と対立が生じ、宣毅軍士は邵興の下に知州に抗し、蜀に赴いたという（長編卷一四四、慶暦三年冬十月丁酉条）。その後長編は張海の乱の拡大を記し、反卒の光化軍宣毅兵も五百余人から、千余人に達したが、韓琦らの施策の結果、

仍召謝雲行等、將沿辺土兵、入山捕張海等、邵興以無援、竄入興・洋界被殺（十一月辛巳、德、驍擒邵興於增水）、

とあって（長編卷一四、是歲条）、張海の乱をうつべき宣毅軍が反乱に与したものの、最後は沿辺土兵に鎮圧されたというのであって、宣毅軍の役立たざるは明らかである。当局の対策も相変らずで、諫官歐陽脩に至っては、宣毅軍反乱鎮圧策として、その家族を市中に戮し、以後の反乱統発を止めんと乞うというが如きで（長編卷一四五、慶暦三年十一月壬午条）、これでは逆に反乱兵に徹底反抗を決意させるものであった。

よって張海らの乱が鎮圧されても、以後に宣毅軍による反乱再発の

危険は残った。即ち、

（慶暦）四年正月十八日、知亳州夏竦言、乞降密旨付本州、如有宣毅軍士屬於蟬衆作賤盜、情理重者、許便宜処断、從之、（宋会要稿、兵一四便宣行事）とあるのもそれで、又、その後に宣毅軍の質的低下も続いた。長編卷一五四、慶暦五年正月丙戌条の「先是田況言」の一節にも、

於諸路宣毅、広捷等軍、其間孱弱者甚衆、大不堪戰、小不堪役、逐処唯欲広募、以邀賞格、豈復顧国家之利害哉、

と記されている。以上の結果が、前掲の如く慶暦五年二月戊子朔に韓琦の言によって宣毅軍一指揮が三百人とされるなどの整理策として実施されたのであろう。勿論この一策で事情の好転が認められるはずもなく、かえって、「時上封者言、京東武衛・宣毅軍皆土人、凶悍者衆」（長編卷一五八、慶暦六年五月壬辰条）とすらあり、御史中丞張方平の言はさらに具体的に宣毅軍兵士の質的低下を示す。即ち、

（上略）自慶曆初遣朝臣、分往京東西等路、招刺彊壯弓手充宣毅軍、俄又聽其傭人自代、於時臣知諫院、固爭此事、朝議已行、不為停罷、今民力所以大困、国用所以一空、蓋由此一挙之失也、其諸路宣毅、悉聚游惰不逞之民、非有材力技勇之所選也、緣光化軍軍賊竊發、朝廷条約失休、姑息過当、如養驕子、転生怨讟、臣比在審刑、諸州奏到、宣毅兵士文案、無日不有、大則謀欲殺官吏劫倉庫、小則謀欲劫民戸入山林、多至三五十、少亦一二十、數以告賞之利重、故有謀、輒被告發、間雖聞習、乃同兒戲、無益軍国、坐竭官私、不征不役、居惟念乱、儼乘釁隙、必有応響之勢、此其

乱階一也、(長編卷一五九、慶曆六年冬十月甲戌案)

という。張方平は右の一文につづけ「此亦思患予防之大略」とあり、「宣毅冗兵漸謀消汰之術」と記すことから、宣毅軍の一層の効力の喪失さらには宣毅軍衰滅の将来が予想されよう。

結局こうした宣毅軍士により慶曆七年には王則の乱がおこっている。即ち王則は燕山府路涿州より河北東路貝州に飢饉により流れ来た者で、「自売為人牧羊」する身から「後隸宣毅軍、為少校」とある者で(長編卷一六二、慶曆七年十月戊戌案)、宣毅軍初置をふり返えるに、主戸出身の弓手、強壯より宣毅軍は成っていたのに比べ、如何に軍士の質が低下していたかがさらに明らかであろう。

しかるに一方、樂全集卷二三、論京師軍儲事には「蓋自慶曆七年、揀発京東西江湖淮浙宣毅兵士、充填在京諸軍」とあり、三山志四明志にも、慶曆八年、福州、明州宣毅軍より近上禁軍填補のことがみえる。つまり、慶曆七、八年にかけ京師周辺から福建まで宣毅軍の優秀兵士が抜きとられているのであって、さらに宣毅軍士の低下が進んだわけである。

右の結果は仁宗朝後半に次の如く示される。

(皇祐)五年、江淮・荆湖置教閱忠節、州一營、大州五百人、小州三百人、於是、宣毅寢廢不復補、而荆湖、広南益募雄略、(宋史卷一八七、兵志一禁軍上)

即ち、忠節軍設置に対応して宣毅軍の地位は低下しているのである。かくて仁宗朝末期には東南諸路の宣毅軍はかなり減った様である。前

掲樂全集の慶曆初年の宣毅軍指揮数と、宋史卷一八七、兵志一禁軍上、建隆以来之制に示される仁宗朝末年のそれとを比較すると、

路名	淮南	兩浙	江東	江西	湖北	湖南	福建	計
仁宗慶曆初年	32	22	13	17	19	11	12	126
仁宗朝末年	22	13	1	8	14	12	8	78

右表の如くなり、指揮数のみの比較であるが急激に減少したことは明らかで、この間慶曆五年には一指揮五百より三百に減じていたから、兵額の減少はさらなるものがある。

東南諸路の宣毅軍がかくの如く質量ともに低下減少するものの、国内治安維持の要請に変化なしとすれば、当然宣毅軍に代る就糧禁軍の設置が先ず考えられて然るべきであろう。

ではそれは如何なる軍名であろうか。既に忠節軍・雄略軍の設置はみたが、然しより大きな位置を占めて宣毅軍の後を継いだ就糧禁軍は、威果軍とみてよいようである。例えば陳傳良の一文には、宣毅軍設置にふれた後「至威果既多矣」とあったし、福州では三山志に「嘉祐四年詔置就糧禁軍兩指揮、各四百人、以威果為名、除捕盜不許他役」とし、仁宗朝末年に治安維持専念の威果軍の設置を記すが、さらに後文で、前知州曹頴叔の宣毅軍衰退の言を記したあと「至是既置威果、熙寧四年、遂以本州就糧歩軍撥入、宣毅亦廢」(三山志卷一八、兵防類一、威果指揮)とあり、こ



れだけからも威果軍の地位が了解されよう。

今はこれ以上に言及する余裕をもたず、詳細は別稿に期すこととし先ずは威果軍が東南要郡に嘉祐四年設置され（長編卷一八九、嘉祐四年五月丁巳条）、以後増置された如くであり、その間北宋末までに宣毅軍は威果軍等に併帰するなり欠額をもって消滅し、威果軍は広南路澄海軍と同様に両浙路中心に東南諸路にあって就糧禁軍として南宋まで存続した事を指摘し、北宋末の宣毅軍消滅をもって、宋代就糧禁軍の言及を一応とどめたい。

## 一〇 まとめ

以上、宋代就糧禁軍について、保毅・保捷・宣毅・威果あるいは澄海軍などを採りあげ、北宋時代の仁宗朝前後に限って管見した。

結局、就糧禁軍とは、就食し易き地に存するを第一義とするよりも、現地地方治安維持を主目的として、郷兵等の土兵をもって昇格設置されたもので、西北辺から、東南にいたる各州郡に拡大されたものである。国初の中央集権化構想とは相反するかにも思われるが、禁軍を全て京師より更戍せしめたのでは、国家財政上からの問題もあり、就糧禁軍という形式で土軍を地方に布置すれば、現地兵の特色を生かしてかえって治安維持に有効と考えて設置されたものといえる。然して宣毅軍においてみた如く、その後兵士の質的低下は時間を追って明らかとなったがこれに代るべき兵種を見出せず、そのまま存続させるか、同じ就糧禁軍たる威果軍などを新設して、一応これが刷新を計り、就糧禁軍なる形式を継続せしめたといえる。

北宋後半以後の就糧禁軍の推移については、陳傅良に「由是禁軍始遍天下」とか「於是、養兵始為大患」なる指摘があり、南宋にかけて、まだ就糧禁軍として言及さるべき問題を多数残していることはいうまでもない。この点は威果軍の事例を中心にいづれ別稿で取り扱う予定である。今は宣毅軍の衰退を示すことをもって、稿をとどめることにしたい。

なお就糧禁軍には保捷軍や宣毅軍のみでなく多くの指揮名があることはいうまでもない。付記しておくたい。<sup>①</sup>

註(一)① 関係する論考の二、三を記せば、浜口重国「府兵制度より新兵制へ」（秦漢隋唐史の、研究上所収）、堀敏一「五代宋初における禁軍の発展」（東洋文化研究）、菊池英夫「五代禁軍の地方屯駐」（東洋史研究）、羅球慶「北宋兵制研究」（新亞學報第一卷第一期）等がある。

(二)① 本城については、曾我部静雄「宋代の刺配について」（文化二九）参照。

② 原文羅賤を同書卷四〇により羅賤に改む。

③ 「元豊兵令……始遍天下」の一節は静嘉堂文庫蔵本により補う。

(四)① 土軍については、曾我部静雄「宋代の巡檢畧尉と招安政策」（東北文学部研究年報第一四号）参照。

② (兵) は統資治通鑑長編撮要卷八十之三仁宗皇帝紀十七之三の該当記事より補う。

③ 東兵を関東の兵と解したるは、夏竦・文莊集卷一四、陳遼事十策参照。

(五)① 保毅軍については、小笠原正治「宋代弓箭手の研究」（東洋史学論集第二）参照。  
② 陝西保捷軍は一三五指揮とあり、二位は京畿虎翼軍の九六指揮であ

る。

(六)①張方平 欽全集卷二四 論国計事に、「略計、中等禁軍一卒歲給、約五十千」とあることよりすれば、七十緡の計算とすれば如何にも多額となろう。

(七)①長編卷一三一、慶曆元年二月戊戌条の原註に、張方平の所陳八事の疏は「其十一月十二月之間乎」と記す。

②右の張方平の所陳八事は前掲曾我部「宋代の巡檢・県尉と招安政策」に逐条原文を引用、解説が加えられている。参照の事。

(八)①福建路の澄海軍・宣毅軍については、乾隆泉州府志卷二四、軍制、宋軍制も参照。

②原文領北、宋会要稿兵五、屯戍、大中祥符五年九月条「嶺北州軍」参照、改む。

(九)①淳熙三山志卷一八、兵防類一、威果指揮、参照。

②前註三山志の項及び、宝慶四明志卷七、郡志卷第七、叙兵、威果三十指揮参照。

③前掲、堀論文において、右兵志、建隆以来之制を整理され、「大体仁宗末年における駐屯地を示したもの」とされる。今これに従う。

(一〇)①例えば「本路(河東)就糧禁兵六万余人、惟宣毅最多最不精」(歐陽文忠公集、河東奉使奏草卷上)とあり、宣毅軍以外の就糧禁軍の無視出来ぬ事は明らかである。又一方では宣毅軍を考察主対象とすべきも明かである。  
(本学専任講師・東洋史学)